

(六) アスターテ前夜

第四次ティアマト星域会戦での功績により、ラインハルトは上級大将への昇進を内示された。併せてローエングラム伯爵家の継嗣を認められ、ローエングラム伯ラインハルトを名乗ることになった。

ただし、伯爵家の正式な継嗣は二〇歳を迎えてからとされ、上級大将への辞令もローエングラム伯に対して手交されると伝えられた。

「慶事は併せ行うがより喜びも大きいものと言つ。ますます励まれよ」

皇帝の名代として決定事項を伝えたりヒテンラーデ侯の言葉に、ラインハルトは一ミリグラムの感銘も受けなかった。彼に言わせれば、慶事云々など、ラインハルトの伯爵家継嗣と昇進に苦情を鳴らし続ける門閥貴族たちへの姑息な配慮以外のなにものでもない。

「ふん、お預けをするつもりか。だいたい、そんなものを喜んでしつぽを振り回したり、よだれをたらしたりするとも思つてゐるのか」

その証拠が、ミュッケンベルガー元帥自身に呼びつけられ、手渡された命令書だ。さすがに極秘たるべき命令書を下宿に持ち帰るなどと言う不用心なことはしていないが、統帥本部と艦隊司令部の官僚たち（おとこ）がもつともらしくでつち上げた作文を記憶するくらい、ラインハルトから言えば児童戯にも等しい。

「新作戦ですか……」

キルヒアイスの声が低くなるのは、万一にも声が部屋の外や、これはあまりありそうにないが階下にまで漏れたりするのを警戒

してのことだった。

帝国では密告への心理的な敷居が極く低い。共和主義者摘発の目的で大帝ルドルフがそれを奨励し、歴代の皇帝たちも密告を帝国に対する忠誠の印とみなしてきた。皇帝への不敬を示す言葉であればその断片ですら、容易に密告の対象となってしまうのだ。どんなにささいな内容であっても、受け付けた官憲には調査の義務が課せられるし、『下らぬことでお上を煩わせるな』などと密告を退けようものなら、その行為自体が許し難い不忠として密告の対象となる。

帝都のあらゆる施設の中でリンベルグ・シュトラッセの下宿の自室は唯一、盗聴の心配をまったくなくて済む場所だったが、それでも細心の注意を怠って良い理由にはならなかった。防音は完璧ではなかったし、階下では下宿の二人の大家：フーバー夫人とクーリヒ夫人：が生活している。彼女たちも生粋の帝国人であり、ラインハルトが胸に深く蔵している不逞の野心を言葉として耳に入れば、ためらいもなく内国安全保障局のドアをノックするだろう。

「ここにも随分、世話になったが、そろそろ潮時だな」

ラインハルトの口調に名残惜しげな響きが混じるのは珍しいことだった。ラインハルトにしてみれば、キルヒアイスの隣家に越すまでの少年期を過ごした家を除けば、最も長く彼の『我が家』となったのが、この下宿だった。下宿の大家である二人の未亡人の昔話が多少くだいのと、将官になってすらラインハルトを子供扱いするのがやや煩わしくもないこともなかったが、それでも周囲すべてが敵も同然な中、唯一気を緩めることが許される、貴重な場所だった。

ラインハルトが『潮時』と言うのは、彼ら自身と大家の未亡人二人の事情を同時に慮つてのことである。上級大将はともかく、

伯爵ともなればそれなりの体面を求められる。本来、独身尉官クルースの住まいであるこの下宿は、下級貴族出身の帝国軍大将の自宅として辛うじて許容範囲：それも、許容の幅を思い切り広くして：だが、伯爵邸とするには無理がありすぎる。

同時に、そして、こちらの方が大きな理由なのだが、伯爵として大貴族の一角に加われれば、敵は戦場だけの存在ではなくなる。これまでも蛇夫人を初めとして、多くの敵から何度となく刺客を送られ、悉くを退けてはいる。しかし、クロブシュトック侯の例を引くまでもなく、宮廷での権力を巡っての闘争は凄まじい。一つを誤れば、二人の未亡人までが巻き添えになる可能性は低いのだ。

卑劣な暗殺者やその依頼者がどうなろうと心の痛むものではないが、彼らに住まいを提供したというただそれだけの理由で二人に犠牲を強いることなどできる話ではなかった。

すでに転居の意思は二人の未亡人には伝えてあり、ラインハルトの意を受けたキルヒアイスは新たな住居探しに手を着けていた。警備の行き届いた高級ホテルのスイート・ルームを借り切るという話も一度は出たが、これはラインハルトが難色を示して立ち消えになった。ホテルでは従業員、悪くするとオーナー自身が買収されて敵に回る可能性があるし、万一にもテロのターゲットとされた場合、周囲に及ぼす被害が大きすぎるという理由だった。その点、キルヒアイスもまったく同意見だったからホテル住まいという案は放棄した。

そんな中、ロイエンタール少将からのコンタクトが入ったのが数日前。帝都シュワルツエン区の近くで程度の悪くない没落貴族の館が売りに出されているが、近い将来のローエングラム伯爵として入手する意思があるかとの内容で、その意思があるなら仲介者には自分からコンタクトをする：とのことだった。無論、決ま

るまではローエングラム伯の名は出さないし、整備する際にも事前に妙な細工をされたりしないように気心の知れた業者を入れる用意がある、と言う。館は何とか言う伯爵の別邸で、大貴族の居館としてはさして広い部類には入らなかったが、現在の下宿に比べれば数十倍の広さがあった。

広すぎるし、手が回りかねるのでは、と危惧するキルヒアイスに、こういうものかこのときはラインハルトの方が乗り気になっていた。

「いいさ、話を進めてくれるようにロイエンタールに答えておいてくれ」

「ご自分ではご覧にならないのですか？」

「そんなもの、図面と地図を見れば十分だ」

どうせしばらくは地表にいるよりも宇宙に出ている生活の方が長いから、日当たりの良さだの、庭木の具合だのといったものを氣遣ったところで意味はない。

「敷地が十分広いし、周囲にむやみに高い建物もない。狙撃の危険は少ないし、万一の場合にはすぐに外に出られる。新無憂宮から遠すぎないから、将来のことを考えると便利だ」

「それでも広すぎますね。部屋だけでも二〇以上もあります」

ふっとラインハルトが微笑を消すのを、キルヒアイスは不思議なものを眼で見た。

「俺たちだけで住むのならな」

肩をぽんと叩かれ、キルヒアイスはラインハルトの言外の意図を察した。彼ら以外に、彼らと居を共にするべき人といえは一人しかない。かつては遙か時の地平線の彼方にすら見通せなかったその日が、その人を迎え入れる居館を用意しなければならぬ程の近さにある。そう思うだけで、心が翼を得て舞い上がるようだった。

「今より手狭になりますね。我慢して頂けるでしょうか」

敢えて主語を省略して平凡な応答を選んだのも、ともすれば躍り出しそうな口調を抑えるためだった。

「整備するときには不自由がないような準備をさせればいい。俺たちではよく分からないが、専門の業者というやつがあるだろう？ それに頼めばいい」

「——ええ、そうですね。ところで、新作戦のことなのですが、さりげなく、キルヒアイスは話題の方向に修正を入れた。このまま、その日のことを話し続けられ切りがないし、その日までの時間を少しでも短くしようとするのであれば、やるべき事は現実への対処であって夢物語に時を費やすことではない。

「どのような？」

「下らない。あれを作戦などと呼んだら、作戦という言葉に失礼と言うものだ」

ラインハルトは吐き捨てる口調で肩を疎めた。

命令書の文章から過剰すぎる装飾を取り払ってみれば、残っていたのは甚だ無内容な中身だった。曰く『叛徒領に侵攻し、叛徒共を撃破せよ。ラインハルトに言わせれば、こんなものは命令でも何でもなく、ソリヴィジョン中毒の小学生が遊戯の最中に喚き散らす命令擬きでしかない。

そんなものに従って真面目に作戦計画を立てるなど時間の無駄に他ならない。

かつ、前回ティアマト星域でラインハルト艦隊の両翼部隊を指揮した二人の少将：ミッターマイヤーとロイエンタール：はラインハルト麾下から外され、代わってメルカツツ大將他四名の提督が分艦隊指揮官として新たに指揮下に入るといふ。いずれもラインハルトを、姉の皇帝への寵愛に乗じて地位を得た生意気な孺子と見る立場に属しており、艦艇数こそ二万隻が用意される予定だ

が、数通りの戦力を發揮できる保証はなかった。軍務省や統帥本部による官僚的人事の結果ではなく、これはもはやラインハルトに功績を立てさせまい、あわよくば失敗させようとの悪意に基づく編成としか言いようがなかった。

そもそも帝国軍三長官などともつたいぶっている連中からして、『勝利を得る』とはどういう事なのか分かっていない、としか思えない。声こそ抑えていたが、辛辣さを増したラインハルトの微笑が細身の剣を思わせて皓い。

「いつもそうだが、連中は味方が受けた損害より多くの損害を相手に与えれば勝利だと言いたがる。蒙昧さ、度し難しだ」

勝利者とは、戦略上の目的を果たした者に与えられる称号である。では、今次の戦いにより、帝国軍が解決を望む戦略的課題とは何なのか。

キルヒアイスはかぶりを振った。

「——何も、ありませんね」

「そうだ。何も無い。戦って勝ったとしても、同盟軍が減るわけでもない。負けたとしても、別に同盟軍がこちらへ侵入してくるわけでもない」

そもそもイゼローン回廊を挟んで延々と戦い続けている現在の状況を良しとしている段階で、帝国も同盟も戦略を見失っていると言わざるを得ない。

「まるで戦いが終わらないように協定でも結んでいるようですね」

これも相手の聴覚に届く最小限度の音量で囁いてから、キルヒアイスは自分の言葉が奇妙に予言的に響くのを感じた。帝国と同盟は既に、一五〇年にもわたって戦い続けている。連続的な戦闘を続けるような戦争が一〇〇年以上も続くのは、人類史上希有のことである。戦いに伴う疲弊と厭戦感、特に経済的な理由がどの

ような激烈な戦争をも最後には終結へと導いていくものなのだ。にも関わらず、この戦争が一五〇年を経て、なお熄もつとする氣配さえ見えないのは確かに不自然すぎた。

が、この時のキルヒアイスには自分の言葉の意味するところを深く追求している余裕はなかった。彼らはまだ階梯の途中にあり、休む暇もなくさらに高処へ駆け上らなければならなかった。戦争に対して哲学的な思索を巡らせる必要があるにしても、その余裕を得るためには目の前の壁をまず突き崩していかなければならなかったのだ。

新たな戦いに向けての討議は翌日、艦隊司令部の彼らのオフィスにその場を移して続けられた。通常なら十数名のスタッフを集め、数十日にも及ぶ研究と討議の必要な作業を、彼らはわずか二人、数日でやつてのけようとしていた。ラインハルトにしてみれば、与えられているスタッフの中には、キルヒアイス以外に彼の要求する水準の戦略的能力の所有者は見いだし得ない以上、当然のことだった。

ラインハルトとキルヒアイスの意見が一致を見たのは、今回の戦いもラインハルト個人の戦功を稼ぐための戦いとする、というものだった。いかなる戦略課題も設定せず、ただ、華々しい：帝国から見えてそう見える：戦果だけを追求する。その目的で彼らが戦場に選んだのが、イゼローン回廊の同盟側出口の一角を占めるアスターテ星系だった。それも、これまでの帝国軍の戦い方とは異なり、敢えて星系内深く、主星アスターテから数十光分の宙点にまで一気に侵入する。

ただ戦うだけならテИАマトでも、あるいは再びヴァンフリートでもよい。アスターテの外縁宙域でもよかった。敢えて、アス

ターテ星系の深部に侵入したのは意図があつてのことだった。

ティアマトやヴァンフリートには居住可能惑星がない。アスターテの内惑星には凍結した大量の水資源を持った衛星を伴うものがある。居住には不適だが、十分な水資源は前進基地に最適であり、かつ、アスターテの惑星系はティアマトやヴァンフリートに比べて極めてシンプルである。

先年、帝国軍は数千隻規模の高速機動艦隊でエル・ファシル星系への進入に成功しているが、これはヴァンフリート星系からはじき飛ばされた浮遊惑星に仮の補給基地を設けた結果だった。地表温度が零下二〇〇度近い浮遊惑星ですら有力な中継基地になる以上、液体状の水資源を保持できる衛星ならさらに大規模な侵攻部隊への補給拠点を提供し得る。

アスターテ星系を帝国軍が占領し、本格的な補給基地を構築すれば、エル・ファシル星系を初めとする同盟の有人星系の多くが恒常的な侵攻の脅威にさらされる。一度は三〇〇万人もの民間人を避難させる『エル・ファシルの大脱出』^{エグザダス}を強いられた同盟軍にしてみれば、戦略上の痛点を痛烈に刺激されることになるだろう。

「占領はできるかも知れませんが、維持はできませんね」
「その通りだ。アスターテが維持できるくらいなら、ヴァンフリートを確保できたはずだからな。しかし…」

「実際にできるかどうかは問題ではなくて、同盟軍から見れば、我々にそれをやられたくない、という怯えがあるのが問題ですね」
「わかつてるじゃないか」

ラインハルトは笑って大きく頷いた。

「奴らの怯えを俺たちが突く。俺たちは、星系深部に入り込むから、奴らには十分の迎撃準備の時間が与えられることになるし、外縁部ならまだしも、星系内部となると俺たち帝国軍は必ずしも地理に詳しくない」

「絶対に勝たなければならぬ戦いで、しかも、侵攻側が地理不案内となると…」

「絶対に勝てるだけの兵力動員。これが基本だ。少なくとも一・五倍。俺なら二倍は動かすな。今までと違って相手がさつさと逃げ出す心配もないから、連中にしてみれば『夢よもう一度』だ。ダゴンの殲滅戦と同じ、分進合撃に成功すれば圧勝のチャンスだからな」

「彼らが全兵力をひとまとめに揃えて待ちかまえている可能性も否定できませんが…」

「可能性はあるが、俺は薄いと見ている。同盟軍の制式艦隊は、だいたい一個あたり一万二〇〇〇から一万五〇〇〇くらいだったな？」

「そうですね。定数には増減があるようですが…」

過去の戦役をすばやく検索し、表示させながらキルヒアイスは頷いた。概ね、一万二〇〇〇から、多くとも一万四〇〇〇で一個制式艦隊が構成され、一〇個から一二個の常備制式艦隊が存在するもよう、というのは帝国軍の高級士官にとっての常識的知識だった。

ラインハルトが二万隻の艦隊を率いて行くことを探知し、二倍の兵力を動員しようとするれば、同盟軍はどうしても三個艦隊以上を同じ戦場に投入せざるを得ない。

「奴らは帝国軍の老将ともいえる勝負の低脳揃いだ」
^{おいぼれ}

ラインハルトの言葉が白刃の辛辣さを増し、意を得てキルヒアイスが微笑む。

「二倍の兵力を揃えられれば、同盟軍にしてみれば、もうその時点で勝ち戦だと思ひこむでしょうね。万一に備えての作戦検討など、馬鹿馬鹿しくてやっていられないでしょう」

「そうだな。キルヒアイス、一つ調べておいてくれないか」

「同盟軍の上級指揮官、それも今度の戦いでの先任指揮官になり
そんな人物と、その主要幕僚でよろしいですね」

「そうだ。同盟の連中の指揮官は大したことはない。ただ、気に
なるんだ」

「ヴァンフリートと、イゼルローンですね」

「ああ、どうも俺の考えを読めるやつがいるような気がする。気
のせいならいいが、万一のことは考えておかないとな」

ラインハルトの危惧はキルヒアイスも共有するところだった。

三年前のヴァンフリート宙域、二年前の第六次イゼルローン要塞
攻略戦：ラインハルトは二度、同盟軍によつて窮地に陥ったこと
がある。いずれも、自身の心理の裏をかいたかのような戦術が、
ラインハルトの用兵者としての痛覚に小さな危険信号を伝えてく
るのだ。

「少佐中佐クラスの下級幕僚だと、名前が知られていないかも知
れないが：一応頼む。あと、高速補給艦をどの程度揃えられるか：
イゼルローンの兵站補給部に当たってみてくれ。補給コンテナを
運んで、放り出してくるタイプで良い」

「分かりました」

しばらく考え、キルヒアイスはラインハルトの意図を了解した。
同盟軍が予想に反して分進合撃戦術を採らなかった場合、予備の
作戦に切り替えるための準備に違いなかった。

ラインハルトを嫉視する人々や、あるいは後世の人間からは、
彼が常に戦術上の『D線上のアリア』を踊っている戦場の奇術師
にしか見えないかも知れない。その一面がなしとはしないが、戦
場に出る前のラインハルトは、戦場での勝利が戦場に踏み込む前
の準備段階で九割方まで達成されているとする堅実な戦略立案者
である。ラインハルトは無論のこと、キルヒアイスの目にすら、
戦略上の課題を放置したまま、ただ戦場での殴り合いの積み重ね

で『勝利』と称する何かしらを獲得しようとする帝国や同盟の軍
事指導者たちは異常者以外の何ものでもない。

「たしか、まだ、ノイエシユタウフェンベルグ男爵がおられるは
ずです。確認を取ってみましょう」

旧知の人物の名をキルヒアイスは上げ、ラインハルトはうなず
いた。

ラインハルトの危惧は、大局においては杞憂に終わり、戦場に
おいてはある意味で的中することになった。

二万のラインハルト艦隊によるアスターテ星系侵入は自由惑星
同盟に大きな動揺を引き起こした。同盟政府は、帝国軍の動きに
アスターテ星系への恒常的な前進基地建設の意思を見て取った。
時期を同じくして一〇〇〇隻にも及ぶ高速コンテナ船団がイゼル
ローンを発して同盟領深部へ向かったことが、イゼルローン宙域
の哨戒を担務していた第二艦隊からハイネセンへ伝えられ、同盟
の為政者たちの肺腑を恐怖という名の槍で貫く結果になった。

イゼルローンだけでも手に余り、先年はヴァンフリートの小規
模な基地を排除するだけで制式一個艦隊が振り回された挙げ句に、
その後は数万の大軍を動員しての泥沼のような戦いに陥ってし
まった。この上、アスターテ星系に基地を作られ、エル・ファシ
ル他の有人星系にまで侵入ってこられたのでは、政府の支持率へ
の致命傷になる。総選挙も近いと言つのに！

周知のように、同盟政府は三個制式艦隊四万隻の動員を決定し、
同盟軍最高司令官のロボス元帥に『ダゴンの殲滅戦』再現を厳命
することになった。

絶対に負けられない状況下、負けるはずのない兵力を与えられ
たロボス元帥と彼の幕僚は、アスターテ星系深部での分進合撃に

よる包圍殲滅戦を企図した。

「帝國軍に逃げ帰らせてはならぬ」

それが作戦會議におけるロボス元帥の最初の発言であると伝えられる。後世、『勝つてもしないのに、大勝利を取り逃がすことのみを案じていた』として批判を集めることになる発言である。

これ以外にも、参加した三個艦隊の統一指揮官が明示されていない。密接な相互連絡が欠かせないにもかかわらず、アスターテ星系内に通信中継衛星を増設しなかつたなど、ロボス司令部の戦略的な準備不足への批判は枚挙にいとまがない。前者は会戦開始直後、ラインハルトに意表を突かれたにもかかわらず、最先任指揮官のパエッタ中将が積極的な対応を行えなかつたこと。後者はラインハルトが大量に散布した妨害衛星によって三個艦隊が通信路を遮断されたことにつながり、いずれもアスターテにおける同盟軍大敗の要因を形作つた。

が、何よりも会戦の帰趨に最大の影響を与えたのは、包圍に氣づいた帝國軍がアスターテを脱出してしまふのを恐れる余りに下された命令だつた。曰く、『過早の包圍を避け、決定的段階まで相互距離の保持に留意せよ』。第二艦隊次席幕僚ヤン・ウエンリー准将は、この命令を一瞥した瞬間に各個撃破の可能性に思い至り、いわゆる『緩包圍による漸減作戦』への切り替えを具申するが、前任指揮官であるパエッタ中将の却下するところとなる。

このため、ラインハルトの放つた哨戒部隊からの接触を受けてなお、同盟軍の三個艦隊は通常の航行速度を維持し続けた。結果として同盟軍艦隊の位置を把握した瞬間に進軍に移つたラインハルトにより、その包圍網は完全な崩壊へと追い込まれていったのである。まさにヤン准将が恐れたとおりの展開だつた。

この戦いの途上、パエッタ中将は敵将ローエングラム伯を『若くて経験も少ない』と評したとされるが、彼自身、もしくは彼の

幕僚がラインハルトの戦歴を研究した形跡はない。一方、ラインハルトは予想される同盟軍の指揮官としてパエッタ、パストーレ、ムーアの詳細な戦歴を調べさせている。その結果、最先任者のパストーレ中将について『考えに柔軟性がなく、自分の好みで情報を取捨する癖が強い。状況の急変への即応など望むべくもない鈍将』との評価を下していた。

ラインハルトは嗤い、キルヒアイスにこう告げた。

「この男が前任指揮官なら、当初の作戦に固執するの余り、我らが奴らの裏をかくて各個撃破に出てきたという事実そのものを認めまい。目の前に我が艦隊が姿を現すまで……な」

そして彼の判断は完全に正しかった。パエッタの知るよしもないことだつたのだが――

会戦の最終段階、同盟軍第二艦隊の反撃に対して、ラインハルトはそれ以上の戦勝に拘泥しなかつた。ヤン准将の手になる、中央突破を逆手に取つた側面逆進・背面展開という鮮やかな戦術に、対応を一つ誤れば形勢の逆転をすら招きかねなかつたし、事実、エルラッハ少将の戦死を含む艦艇一〇〇〇隻以上の損害は、まさに第二艦隊の反撃によって被つたものだつた。後背に敵を受けて敵前回頭したエルラッハ少将を、ラインハルトは一度は『無能者』と罵倒したもの、その後、少将の率いる分艦隊の反転により、艦隊全体が態勢を立て直す貴重な時間を得たことを認めている。

後日、最高司令官の命に反して戦死した提督としては異例なことに、エルラッハ少将は帝國軍大将の地位を追贈される。ラインハルト自身の上申によるものだつた。

ム伯爵の名を嗣ぐものとして、大貴族どもも認めざるを得なくなる」

帝国元帥は通常の俸給の他に年額二五〇万帝国マルクもの年金を下賜される身分である。が、それよりも帝国軍の中でわずか五名しかない最高の地位であることが重要だった。さらにローエングラム伯爵としてローエングラム星系の支配権が与えられるのだが、星系支配による収入は帝国元帥としての俸給の比ではない。つまり、ラインハルト自身が帝国軍の軍事官僚としてだけでなく、大貴族の一員としてもその経済力において確固たる地位を確立することになるのだ。

「あと、一年。もって二年だ」

ラインハルトの口にした数字の意味は、キルヒアイスにとつて自明だった。瞬時に理解が生じ、電撃に似た戦慄が背を駆け上る。あと一年、おそくとも二年の内にラインハルトは玉座までの階段を一気に駆け上り、あの老人を、その相応しからざる場所から追い落とす決意を定めているのだ。

「戦いは……大きな戦いは避けられませんか」

「ヤン・ウエンリーは今、准将だと言ったな」

今回の戦いでヤンの働きは鮮やかを通り過ぎて、空恐ろしいものをすら感じさせる。同盟軍がヤンを少将以上の地位に就けないとすれば、かえって異常である。

「あと一年から二年の内に、ヤンは中将以上の位置に上がっているだろう」

「つまり、より多くの兵を動かし得る立場に立っている……と？」

「そうだ。たとえば、帝国の内乱への軍事介入を決定できるような立場、だ」

間にイゼルローン要塞があります……などという反論が、キルヒアイスの口から出ることはなかった。

胸を突かれる思いで、キルヒアイスは金髪の若者の顔を見つめた。

「安心しろ、キルヒアイス。俺は貴族どもとヤン・ウエンリーを両手に引き受けて戦いたいと思うほど、戦いには飢えていない。ヤンと同盟のやつらについては帝都に帰ってから考えよう」

「さようですね……」

うなずいたとき、航法参謀の一人が用ありげに遮音力場の外側に佇んでいるのに気が付いた。

「どうしました？」

問うキルヒアイスに、件の参謀は、先遣部隊が浮遊している輸送コンテナを探知したことを告げた。数万にも及ぶ数であり、通常の消費物資以外に、アスタールで消耗した武器弾薬の類を全艦隊に行き渡らせるに十分な量だという。

「どうなさいますか？」

「予定通りだ。全艦で回収させる」

万一、同盟軍が二倍の艦隊を一回に固め、『大軍に戦術なし』の戦いを挑んできた場合の、それがラインハルトのかけた保険だった。その場合はアスタールなど放り捨て、一気にエル・ファシルか、更にその奥の無防備な有人星系を強襲する。無差別爆撃で市民を虐殺する趣味は、ラインハルトにはなかったから、目標はこれらの星系に配置された同盟軍の補給基地の破壊と、その駐留警備部隊の撃破、および商船の拿捕だった。

ラインハルトとキルヒアイスの計算に拠れば、同盟軍がアスタールに向かわせた三個艦隊、および他星系に駐留している他の制式艦隊を動員してラインハルト艦隊への追撃態勢を立て直すまでには約半月を要する。その間に、すくなくとも一〇の有人星系を襲い、警備艦隊だけでも三〇〇隻以上を撃破、千隻単位の商船を拿捕・破壊してのけられるはずだった。自由惑星同盟の商業

航路に与える影響は、直接的なものだけでも数百億デナール。保険金掛け金と辺境宙域での物価の高騰、辺境宙域から同盟首都宙域へ運び込まれる資源量の減少などの間接的影響はその五〇倍以上に達する。考え方次第では、アスターテでの損失よりも、同盟の国力に与えるダメージは大きいかも知れなかった。

そして、予め一〇〇隻にも及ぶ高速コンテナ船で補給物資をアスターテ星系から数光年の位置にばらまいておき、帰路、これを回収して消耗した物資の補給に充てる。

幸い、アスターテでの戦いはラインハルトの意図通りに進み、放出した物資は無用となつた。置き捨てていつても構わないし、武器の類は予めセットしたタイマーで爆破されるから同盟軍を資する恐れもない。

が、同盟艦隊が壊滅状態に陥つたこともあり、ラインハルトは示威を兼ねて回収を実施することに決めていた。

「食料品の中にアルコール類は入っていたか？」

「ええ、入っていますね」

「では兵たちに告げる。当直要員以外は酒を含めて酒保許す。支払いも不要だ。ただし、当直を交代するまでに必ず酔いを醒ますよう厳命しろ。違反者は処刑する、とな」

「承りました、ラインハルト様」

「キルヒアイス……」

踵を返しかけたキルヒアイスの背を、ラインハルトの声が追いかけた。

「あともう少しだ」

——了解です、ラインハルト様。

赤毛の頭を微かに縦に動かしたただだったが、キルヒアイスにはそれでラインハルトに通じていると確信することができた。

『ブリュンヒルト』からの命令に、帝国軍の各艦は『ローエン

グラム伯、万歳』の歓呼で応じる。シュターデン中將は『あの孺子、いい気になりおつて。祝い酒だ！』と怒号して、命令の受領を拒絶した。一方、メルカツ、フォーゲル、ファアレンハイトの三将は、無表情、呆れ顔、苦笑と表情こそは異なるものの、ラインハルトからの命令を麾下各艦に伝達し、自らも酒杯を手にしたのである。

時に、帝国暦四八七年二月。

この戦いを境に、ラインハルトの周囲で、時の流れが俄にその速度を速め出したかのようだった。